

令和3年度 日本語教育能力検定試験 解答例

千駄ヶ谷日本語教育研究所

試験 I

問題1	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
	1	3	2	2	5	4	2	5	4	2
	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)					
	3	5	1	4	3					

問題2	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	2	4	3	4	1

問題3	A					B				
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
	1	3	4	1	3	4	4	1	3	1
	C					D				
	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2	1	1	2	4	1	3	4	2	1	

問題4	問1	問2	問3	問4	問5
	2	1	4	3	4

問題5	問1	問2	問3	問4	問5
	3	1	2	3	3

問題6	問1	問2	問3	問4	問5
	3	1	4	2	1

問題7	問1	問2	問3	問4	問5
	2	1	2	4	3

問題8	問1	問2	問3	問4	問5
	3	1	3	3	1

問題9	問1	問2	問3	問4	問5
	3	4	1	3	4

問題10	問1	問2	問3	問4	問5
	4	1	2	3	2

問題11	問1	問2	問3	問4	問5
	2	4	4	1	3

問題12	問1	問2	問3	問4	問5
	2	1	3	2	2

問題13	問1	問2	問3	問4	問5
	1	2	4	3	4

問題14	問1	問2	問3	問4	問5
	1	3	4	1	2

問題15	問1	問2	問3	問4	問5
	2	1	4	2	3

試験 II … 略

◆ この解答例は千駄ヶ谷日本語教育研究所で作成したもので、検定試験実施団体から公表されたものではありません。

試験Ⅲ

問題1	問1	問2	問3	問4	問5
	3	4	1	1	2

問題2	問1	問2	問3	問4	問5
	2	4	2	4	3

問題3	問1	問2	問3	問4	問5
	1	3	1	3	2

問題4	問1	問2	問3	問4	問5
	3	2	1	4	2

問題5	問1	問2	問3	問4	問5
	4	2	1	3	1

問題6	問1	問2	問3	問4	問5
	4	1	2	1	4

問題7	問1	問2	問3	問4	問5
	3	4	4	3	3

問題8	問1	問2	問3	問4	問5
	3	4	1	3	2

問題9	問1	問2	問3	問4	問5
	4	3	3	1	2

問題10	問1	問2	問3	問4	問5
	1	2	3	4	3

問題11	問1	問2	問3	問4	問5
	3	3	1	4	4

問題12	問1	問2	問3	問4	問5
	1	4	4	2	2

問題13	問1	問2	問3	問4	問5
	3	2	1	4	3

問題14	問1	問2	問3	問4	問5
	4	1	1	3	2

問題15	問1	問2	問3	問4	問5
	3	1	4	4	4

問題16	問1	問2	問3	問4	問5
	2	3	2	4	1

◆この解答例は千駄ヶ谷日本語教育研究所で作成したもので、検定試験実施団体から公表されたものではありません。

試験Ⅲ

問題17

学習項目が話し言葉で用いられるなら、それを用いた会話例をいくつか動画にする。動画には学習項目の解説は入れない。学習者はその会話例から学習項目の意味・用法等を推測したり、様々なリソースを活用して調べたりして学ぶ。

対面授業では、動画で学んだ言語知識を共有する。教師はそれらについて修正や補足を行う。その後は、言語知識を運用するロールプレイをいくつか行う。ペアで練習した後、発表し、フィードバックを行う。フィードバックは、教師も含めクラス全員で行う。

言語知識は、ある程度一人で学べる。上級の学習者は日本語能力レベルが高い。初・中級の学習者より活用できる人的・物的・社会的リソースが豊富である。言語知識の学習を事前学習にしても十分学べる。

一方、言語の運用能力は、使う体験を積まないと身につかない。

この活動では、上級の学習者にとって事前学習で自律的学習に、対面授業で運用能力の育成に多くの時間が充てられるというメリットがある。(408字)

このクラスを対面授業で行うと想定し、教室でディスカッションを行う計画を提案する。予習として、学習者にはディスカッションの実施を告知し、3つの動画(①題材に関する資料映像②使用する文型・表現の意味や使い方③構成や談話のフローチャート)を事前に視聴するよう指示する。授業では、ディスカッションを実施し、その後で①②③について意見交換し振り返りをさせる。反転授業にすることで、授業内での文型・表現の意味理解や話したいトピックを整理する時間が削減でき、アウトプットの練習に時間が費やせるようになる。また、学習者も授業に向けどのような意見を主張するか準備でき、目的意識を持って授業に臨むことができる。さらに、授業では強制的にアウトプットの場ができるため、身に付けた表現の使い方を習得できる。そして、最終的にはお互いの考えを学んだり、指摘し合ったりすることで、上級文法を運用するための協働学習ができると考える。(399字)

◆この解答例は千駄ヶ谷日本語教育研究所で作成したもので、検定試験実施団体から公表されたものではありません。

◆今年度の試験についての感想◆

試験Ⅲ問題17の記述式問題であるが、令和2年度(前回)は、指定された用語を用いて自身の考えを述べる、という新傾向の問題で難易度が高まった。

本年度は、従来のタイプに戻り、自身の考える教育活動とそれについての理由を説明する、という問題であった。

しかし、「上級文法クラスの反転授業」について、以下のように詳しく述べなければならない。しかも、400字程度でまとめるというのは、かなり難易度が高い。

【教育活動】

- ①事前学習の内容(知的伝達の段階における動画の内容)
- ②対面授業の計画(①の後の、60分の授業で反転授業のメリットを十分に活用できるような計画)

【理由】

- ・上級文法クラスにおいて効果的と考える理由

検定試験の合格者像は、以下のとおりであるが、他の問題は、その「核」を測定しているのか、と感じるような問題が相変わらず多く出題されていた。

日本語教育のスタートラインに立つための知識・能力を備えた人材

多様な現場に対応するために、その核となる

- 基礎的な知識を体系的に有する。
- 基礎的な知識を実践と関連づける能力を有する。

(「日本語教育能力検定試験の改定について」日本国際教育支援協会)